松山市教育会情報

発行所　松山市教育会
松山市祝谷町1-5-33
☎ 089－933－0354
ホームページアドレス
http://matsukyouikukai.main.jp/
発行責任者　堀内秀樹
編集　調査研究部

つながり

副会長
中野公雅

「子規さん俳句かるた」より
松山市教育委員会　編
松山市立子規記念博物館　監修

会員の皆様におかれましては、御健勝にてお過ごしのことと存じます。

さて、この約２年間、新型コロナウイルス感染症は世界中に不安と混乱をもたらすのみならず、我々の社会生活におけるあらゆる場面に深刻な影響を及ぼしました。専門家からは新しい生活様式が示され、それによって娯楽やスポーツ、人との接触などに制限が設けられました。学校現場でもこれまでに経験したことのない長期に及ぶ臨時休業措置が執られたり、修学旅行や運動会・体育大会、文化祭など学校行事の実施に関して、延期や規模の縮小などの判断や対応を迫られたりしています。そのような中、どの学校でも学びを止めないために、児童生徒のモチベーションを高め、工夫をされていることと思います。中学校に勤める私が、特に気がかりだったのは義務教育の最終学年である３年生のことです。行事が例年どおりに実施できないことに対する生徒の落胆を感じながらも、どうすることもできない状況にやりきれない思いでした。しかし、大人たちの心配をよそに、生徒は素早く気持ちを切り換え、それぞれの行事や活動を温かく感動的なものにしてきました。もちろん、そこには教職員の大きな支えもあったのは事実ですが、生徒はコロナ禍のこの状況の中でも今できることをしっかりと考え、たくましく前へ進んでいるというのが私の実感です。

その教職員自身にとっても、松山市教育会における総会や理事会では書面表決やリモートでの開催、趣味やサークル活動や現職会員研修を目的とした「教育講座」の中止等といった状況が続きました。これにより、これまで培ってきた社会と学校とのつながりが失われていくのではないかとの不安の声もありました。そこで、松山市教育会では昨年度、支部活動の一層の活性化を目指し、「検討委員会」を発足させました。この検討委員会では、現場調査を基に様々な提言がなされました。その一つに「チーム学校人材バンク」の構築があります。これは、「学校は現在、様々な外部の人材を求めている」「多くのＯＢ会員は学校の教育活動への支援をしたいと考えている」という調査結果から生まれたニーズに応じるものです。

また、昨年１月に文部科学省から「令和の日本型学校教育」が示されました。その中では、学習指導要領の着実な実施、学校における働き方改革の促進、ＧＩＧＡスクール構想の実現などが挙げられています。社会や教育の大きな変革の中、松山市教育会も現場からの要望に柔軟に対応し、具体的な活動を進めてまいります。これからもどうぞ御理解・御協力のほどをお願いいたします。

えひめ教育の日　記念事業
まつやま教育フォーラム2021　講演会　R3.11.6(土) 文教会館にて

誰でも書けるって本当に？

～ショートショートの書き方講座と、そのすすめ～

講師　田丸雅智（たまる まさとも）氏

＜東大を目指したきっかけ＞

東京大学に入学したのは、宇宙へのあこがれがあり、好きな宇宙物理学の先生がいらっしゃったこと、もう一つは最高の環境で学びたかったということです。松山東高校に入学し、当初の成績は440人中100位くらいでしたが、すごく悔しくて勉強し始めました。自分に足りないものは何かを徹底的に考えて、どうすれば克服できるかを考え、ひたすら実行します。その結果をテストでひろって、改めて自分に足りないものを考える。今でいうPDCAサイクルです。ですが、そうして何が起きたかというと、なんと150位に落ちたのです。僕の人生で一番の挫折というくらいの思いでした。でも、どうしてもやり方が間違っているとは思えず、やり続けると、徐々に順位は上がっていき、最終的には１位を取れるようになり、東大の理科Ⅰ類に進学しました。ちなみに、まだ順位が２桁になったくらいだった高１の頃、担任の先生から廊下で「東大でも目指してみたら」と、いかにも軽い感じで言われたことを覚えています。当初は「何をおっしゃっているんだろう？　無理に決まっているじゃないか」と困惑するばかりでしたが、しだいに「東大は自分も目指していいものなのかも」という気持ちが芽生えていきました。先生のお言葉は、「自分には無理、関係ない」という思いこみを外してくださるきっかけになり、本当にありがたかったです。ほかにも、特に高校時代は人生を変えてくれた先生方との出会いがたくさんあり、感謝の想いしかありません。

＜理系なのに小説家＞

大学では、地球の環境エネルギー問題を研究していましたが、しだいに自然法則を窮屈に感じるようになっていきました。投げたものは重力にしたがって落ちますが、自分が本当にやりたいのは重力に逆らってふわふわと物が浮かび上がるような、より自由な世界なんだと気がついたんです。物づくりとお話づくりは全く違うように思えますが、僕の中では「生みだす」「創りだす」という意味で根本は同じで、その上で、自然法則の縛りの中で創るのか、言語や自身の思いこみの縛りの中で創るのかという違いがあるような感覚を持っています。そして、僕の場合は後者のほうが心地よく、目指すべき方向が物づくりからお話づくりに変わっていったというイメージです。ショートショートを専門にしたプロの小説家になりたいと決意した後も、やることは本質的には学業への取組と同じでした。やるべきことを明確に意識し、足りないものを考える。たとえば、教養が足りないなと感じれば旅に出たり美術館に行ったりする。語彙が足りないと感じれば、漢検１級を取ってみたり日本語の単語帳を自分でつくってみたりする。どうすれば克服できるのかを考えて、ひたすら実行していきました。もちろん、すべてが順調に進んでいったわけではまったくなく、正直なところ苦しい時期は長かったです。ショートショートは売れないからねと言われて本を出してもらえなかったり、ショートショートだけをやっているうちは小説家として半人前だと言われたりしたことも何度もありました。それでも続けられたのは、学業から学んだことが基礎として支えてくれたからです。そしてその基礎は、プロになった今でも変わらず自分を支えてくれているように思います。

＜勉強って役に立つ＞

勉強は、結局は社会で役に立たないという風潮があります。たしかに、社会生活の中で数学の問題を解いたりする機会は基本的にはないわけですが、大事なのは表面的なところではなく、本質のところにあるのではないかと思っています。もっと言うと、個人的には、人生の基礎は勉強から「も」学べると確信しています。「も」と言ったように、人生の基礎というものは勉強からだけではなく、たとえばスポーツ、芸術、学校行事、もしくは日々の些細なことなど、あらゆるものから学ぶことができると思います。その上で、僕自身がそうであったように、勉強から「も」学べるはずだというのが持論です。もし、学業に取り組む時間を「人生の基礎を体得するための時間」だととらえれば、どうでしょうか。勉強というものに対する意識が、おのずと変わってくるのではないかと思います。当然ながら勉強には向き不向きもありますので、勉強だけがすべてだとはまったく思いません。ただ、せっかく学ぶ機会があるのですから、やらされているという受け身ではなく、奥底に潜んでいる大事なことをつかみとるんだという「攻めの姿勢」

で取り組んでみるのも悪くないのではないかなと、個人的には思っています。

＜ショートショート書き方講座＞

「誰でも書けるって本当？」と思われる方や不安な方に、まず、この時間中は「間違いは絶対ない」「何を書いても、言葉を間違えても漢字が出てこなくてもいい」「添削もしない」「楽しんで書いてほしい」ということを何度もお伝えするようにしています。では、どうつくるかというと、まず、ステップ１「不思議な言葉をつくる」ですが、用意したワークシートにのっとって「名詞」や「名詞から思いつくこと」を書きだしていき、それらを組み合わせることで、「発電に使えるタコ」や「ぽかぽかする傘」のような、不思議だな、違和感があるなという言葉を作っていただきます。不思議な言葉ができたら、ステップ２「不思議な言葉から想像を広げる」で「いいところ」や「悪いところ」などを書き、想像を広げていきます。そして最後にステップ３「想像したことを短い物語にする」で、お話にまとめていきます。たとえば、不思議な言葉として「発電に使えるタコ」を作ったとすると、次にもう１枚のワークシートにある「それはどういうものですか、説明してください」という枠で自由に空想、妄想を発揮しながら「電気ウナギの原理を発展させて作られたタコ」のようなことを書いてみます。今度はメリットを考えてみて、「家の水槽で飼っていれば、電気が取り放題になるかもなぁ」とか、「タコの足の先にコンセントの穴があるなら、合計８本挿せるかなぁ」などと空想します。さらにはデメリットについても考えてみて、「便利だからといって、このタコにケトルもレンジもヒーターも挿して無茶苦茶な使い方をしてしまうと、熱くなってゆでダコになって死んでしまうかも」ということを書いてみます。あとはそれをまとめるだけです。

※この後、田丸雅智氏の指導を受けながら、参加者はショーショートの作品を作りました。

＜終わりに＞

ショートショートの創作に親しむことは、文章力だけではなく、いろいろな力を身に付けることにもつながります。アイデアを発想する力や、そのアイデアをつじつまを合わせながらまとめていくことで論理的な思考力を磨くことなどにもつながるはずです。また、日常の見方、考え方も変わります。コーヒーを見たときに、ショートショート的発想では、「コーヒーに別世界が映っているかもなぁ」とか「砂糖を入れてかき混ぜたら、その渦が大きくなって巻き込まれるかも」とか。これらを空想、妄想だ、と切り捨てるのはとても簡単です。ですが、まずは楽しくないですか、と。そして、楽しいだけではなく、いろいろな力を磨くことにもつながっていく。ぜひ、趣味としてでもショートショートに長く親しんでいただければうれしいです。もうひとつ、教育に携わる皆さんに、僕が普段から講座で大切にしていることをお話しします。一つ目は、本当に自由に考えて大丈夫なんだと思っていただけるような雰囲気・場づくりを心がけることです。そのためには、とにかく全肯定です。「それって面白い？」とか「こっちの方がいいんじゃない」とか言われると、想像力はすぐに委縮してしまいます。二つ目は、いかに参加者の方の中から引き出すかということです。迷っている方がいたときに、「こうしては？」と言って具体的なアイデアを出してしまうことは容易です。が、それをやると、参加者の方が提示されたものを「答え」としてとらえてしまう可能性があり、それ以降「これでいいですか？」と答え合わせを求めるような質問が出てくるようになり、自分で考える力が身についていかなくなってしまうと考えます。答えはその方の中にある。それを意識し、引き出す質問を心がけ、ひたすら待つことを大切にしています。三つ目は、添削をしないということです。しっかりした文章を書いて伝える力は大事で、いわゆる「作文教育」に僕は基本的には賛成です。しかし、衝動を最優先で進めていくこの講座の中で添削の視点を入れてしまうと、とたんに周りの目が気になりはじめ、自分でブレーキを踏んでしまう可能性が高くなります。なので、僕は添削を一切行いません。ただ、添削の有効性も大いにあろうかと思いますので、先生方がもし現場で創作物の添削をされる場合は、書く時間と添削の時間は別に設け、その意図を説明しながら行われることをオススメさせていただいています。

最後に、何故この活動をしているか、お話しします。書く体験から始まる読書、というのがあると思っています。これまでも講座をへて、読むことにも興味を持ってくださった方が多くいます。また、ショートショートの趣味人口の拡大も講座の目的のひとつです。僕は日頃から、陳腐化していた俳句を革新して前に進ませた正岡子規のように、ショートショートというジャンルを再び盛り上げ、前に進ませたいという気持ちでやっています。今後は、海外でも自作を発表したり、講座を行うなどしていきたいと思っています。そうして、世界や日本、故郷松山が、空想に満ちた彩り豊かなものになっていけばと願っています。

紙面講座

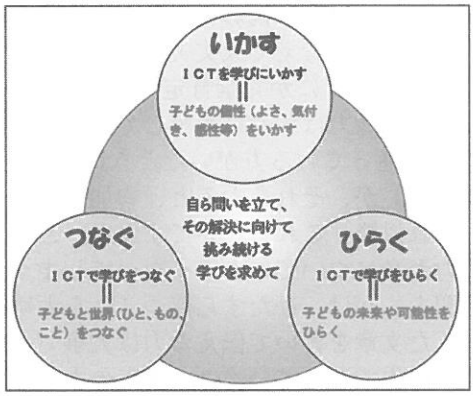
GIGAスクールで変わるこれからの学校

松山市教育研修センター
小田　浩範　先生　　平岡　宗悦　先生

今年度もコロナ禍により、例年行っている「教育講座」を開催することができなかった。そのため、本号では松山市教育研修センターに依頼し、「紙面講座」として「ＧＩＧＡスクールで変わるこれからの学校」について寄稿していただいた。タブレットを活用した新しい学習スタイルの創造にあたり、本稿の内容は、今後学校が進むべき方向を示していただいている。

「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」（令和３年１月26日中央教育審議会答申【概要】）では、「３．2020年代を通じて実現すべき『令和の日本型学校教育』の姿」として、「①個別最適な学び」と「②協働的な学び」、その「それぞれの学びを一体的に充実し『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善につなげる」ことが示されている。そして、「令和の日本型学校教育」構築に向けて、ＩＣＴ環境の活用により「個に応じた指導を充実していくこと」、「ＩＣＴの活用による空間的・時間的制約を超えた他の学校の子供等との学び合い」を充実させることが求められている。

松山市でも、「ＧＩＧＡスクール構想推進委員会」を立ち上げ、「いかす」「つなぐ」「ひらく」をキーワードに、学習の基盤となる資質・能力である情報活用能力や、教科等の資質・能力を育成していくことを目指して、愛媛大学等関係機関と連携しながらＧＩＧＡスクール構想を推進している。松山市教育研修センターでは、「松山市ＧＩＧＡスクール構想一人一台端末活用ハンドブック」や研修動画等を作成してＨＰに掲載するなど、積極的な情報発信に努めている。



令和３年度は、全小中学校で本格的に一人一台端末の活用がスタートするとともに、日常的な持ち帰り（家庭の端末からのクラウドサービスの活用を含む。）を目指した試行が始まるなど、学校の授業や家庭での学習が大きく変わり始める年となった。実際、学習支援クラウドサービス等の活用頻度は月を追うごとに上がり、多くの学校で活用が日常化してきている。

今後、一人一台端末やクラウド環境をどのように活用していけばよいのだろうか。授業や学習でのＩＣＴ活用の段階が分かりやすく示されている「ＳＡＭＲモデル（セイマーモデル）」では、Ｓ（代替）、Ａ（拡張）、Ｍ（変容）、Ｒ（再定義）の四つの段階が示されている。

① **S:Substitution（代替）**：プリントをデジタルで配る、デジタル教科書を読むなど、これまで紙でしていたことがそのままデジタルに置き換わっている段階。

② **A:Augmentation（拡張）**：デジタルで配布された教材を、児童生徒が拡大して見たり考えを書き込んで提出したりする。教師はそれを一瞬で集約し、拡大したり比較したりしながら共有

し、さらに評価に生かすなど、現在多くの学校で行われている「ＩＣＴの効果的な活用」の段階。

③ **M:Modification（変容）**：児童生徒に考えさせる時間を確保するために事前に教材や情報を配信するなど、学び合いが起こりやすいような授業設計を行っている段階。

④ **R:Redefinition（再定義）**：いつでもつながり合えることを生かすとともに、学校でしかできない学びを授業の時間に設定するなど、空間的、時間的に制約されない授業設計をしている段階。

現在は、①や②のようにＩＣＴをどう活用するかが焦点となることが多い。しかし、今後はＩＣＴの活用は大前提で、③や④のように、どのような学びを設計するか、つまり、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善にどうつなげていくかということが大切になる。特に、日常的に持ち帰る一人一台端末（または家庭の端末）からクラウドサービスを活用することで、④のように学校と家庭の学びをつなぐことが求められるようになってくる。

一方で、ＩＣＴの活用頻度が飛躍的に増えてくることで、特に情報モラルやセキュリティに関する情報活用能力を児童生徒に育成していく必要もある。学習指導要領では、情報活用能力が言語能力、問題発見・解決能力と同等の学習の基盤となる資質・能力に位置付けられている。また、「情報活用能力（情報モラルを含む。）」と記載されており、一人一台端末を使用する上で、情報モラル教育を外すことはできない。

情報モラル教育は、情報に対する考え方や態度を学ぶことで、一人一人が自他を尊重し、責任をもって安心・安全にＩＣＴを活用できるよう、道徳科や学級活動、中学校技術科の中だけでなく、各教科等を含めた学校教育全体で、機を捉えて行うことが大切である。また、家庭や地域、関係機関との協力も必要である。さらに、子どもたちにルールやモラル等を指導することと併せて、子どもたちが練習を積み重ね、知識を身に付け、技術を向上させていく経験を保障する中で、自分で考えて正しく判断し行動できるようにすることが大切である。

海外では、「デジタルシティズンシップ教育」が一般的である。「デジタルシティズンシップ」は「情報技術の利用における適切で責任ある行動規範」であり「人権と民主主義のための善き社会を創る市民となることを目指すもの」である。モラル教育が個に対する考え方や態度であることに対し、シティズンシップ（市民権）教育は、他人を尊重しながら市民として社会に参加し、その役割を果たせるようにする教育で、社会の発展につなげていく公の考え方である。「デジタルシティズンシップ」は「どのように使ってはいけないのか」というマイナスの考え方でなく「どのように使えばみんなが幸せなのか」というプラスの考え方で成り立っている。

ＩＣＴは「Information and Communication Technology」の略語であるが、学校で問題となるのは、Communication（以下「C」と示す。）に関することが多い。だからといって、子どもたちの端末活用について、学校が細かく規制し、厳しいルールで締め付けるだけでは、子どもたちが、自分で考えて行動する「C」は育たない。幼い頃から家庭とも協力し、「C」を通して「人に迷惑をかけない、傷つけないモラル」の部分を子どもたちと共に考え、共有していくこと。これが、これから求められる「情報モラル教育」ではないだろうか。「C」を大切にする考え方を広め実践していくことで、「デジタルシティズンシップ」が日本でも浸透していくだろう。

ＧＩＧＡスクール構想による、一人一台端末の活用は始まったばかりである。学校で日常的にＩＣＴを活用するのはもとより、今後は、日常的な持ち帰りや家庭からのクラウド活用を行っていく中で、学校と家庭の学びをつなぎ、これからの社会を生きていく子どもたちに必要な、教科等の資質・能力や、学習の基盤となる情報活用能力（情報モラルを含む。）を松山市の教職員全員で力を合わせて育成していきましょう。（ＱＲコードは教育研修センターＨＰへ）

令和２年度 教育功労者
松山市教育会

松山市教育会では、本年度５月15日の松山市教育会定期総会において、以下のとおり、９氏に教育功労賞をお贈りする予定にしていました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、定期総会が書面表決となったため、直接お渡しすることがかないませんでした。受賞者の御功績を紹介します。

【愛媛県教育会表彰】

松田　邦雄 氏　（桑原支部）

新規採用時（附属小学校）に知的障害児学級で障害児教育を担当する人生をスタートし、一生の大半を障害児教育に奉げてきた。退職後も松山市事業の補助役を受け、12年間にわたり幼児から成人までの施設に勤め、障害児(者)教育の発展に尽くしてきた。現在も愛媛大学教育学部附属学校園で特別支援教育の指導助言の役を受け、教職員の資質向上に努めている。一生の仕事として関わってきた障害児教育への貢献は、計り知れないものがある。

平成26・27年度には松山市教育会会長を務めた。信念と情熱を持って、リーダーシップを発揮し、会員相互の理解を深め活動の活性化を図った。また、桑原支部では評議員を務め、後進の指導役を担っている。長年にわたって湯築地区では清掃ボランティア活動に、桑原地区では朝夕の子どもの見守り・挨拶活動に取り組み、社会貢献を継続中である。

【松山市教育会表彰】

友近　裕識 氏　（退職時　久米小学校）

令和元年度は松山市校長会長、令和２年度は副会長として、校長会をまとめリードするとともに、松山市教育委員会と緻密に連携を図りながら校長会の運営を支えた。令和２年度は愛媛県小中学校長会副会長として、県下の小中学校長が情報交換を密にして新型コロナウイルス感染症への対応に尽力した。

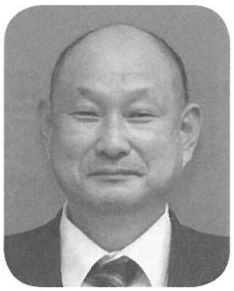
校長として、保護者や地域住民の教育振興への熱意を受け止め、校区や学校環境の特性を生かした教育を推進し、学社融合を目指した開かれた学校づくりに向けて、強いリーダーシップを発揮して学校経営に取り組んだ。また、チーム学校の精神や学校運営協議会を学校運営の中核に据え、全教育活動を通してインクルーシブ教育の理念に基づいた人権尊重の精神や思いやりの心、感動する心を育てるよう尽力した。

三好　建次 氏　（退職時　福音小学校）

令和２年度、松山市小学校長会長として、松山市の校長会運営においてリーダーシップを発揮し、教育界の発展に寄与した。新学習指導要領全面実施としての教育改革はもとより、コロナ禍による臨時休業など、学校経営において困難な局面が続く中、学校経営の在り方を中長期的に見直しながら、安全・安心を第一とした学校経営に取り組み、勤務校のみならず、松山市小中学校全体の教育の向上に尽力した。

令和２年度は松山市教育会副会長を務めた。現職・ＯＢに対し、適切な助言や援助を行うなど、会長を補佐した。松山市における教育の発展はもとより、スポーツ振興や社会福祉の増進、公共の福祉など幅広い視点から今後の教育会の在り方について示唆するなど、常に会員全体の幸せを念頭に置いた教育会の運営に尽力した。

高田　誠 氏　（退職時　道後中学校）



校長として、保護者の願いや地域の期待を真摯に受け止め、郷土愛を生かしたＰＴＡ活動や地域貢献活動を積極的に実践し、生徒が愛着と誇りをもち、保護者・地域から愛される学校づくりを目指して優れたリーダーシップを発揮した。

また、他者への「思いやり」を核に据えた人権意識を高揚させることで、厳しさの中にも温かみのある生徒指導体制を構築し、健全な教育環境を保持しながら個々の生徒に寄り添った教育を実践する強い意志は、職員に自信と安心感を与えるとともに、地域から大きな信頼を集めた。さらに新型コロナウイルス感染症の対応については、地域の特性と実情を十分に鑑み、柔軟な発想力を生かして「ワンランク上の感染防止対策」について陣頭指揮を執り、生徒及び職員の安全確保に大きな成果を上げた。

濱本　順子氏　（退職時　北条小学校）

特別支援教育コーディネーターとして高い専門性を発揮し、献身的に通級教室指導や教育相談にあたる。自主的に特別支援教育についての学習会を主宰し、地域の保幼小の連携や研修の牽引役として活躍した。温和な人柄であり、共感的に保護者に寄り添う態度が信望を集めていた。校内においても特別支援学級のみならず通常の学級における学習指導や教育相談に率先して関わり、児童や保護者及び学級担任の困り感に寄り添いながら、適切な助言や指導を行うことで学級経営の一助となるとともに、児童や保護者からの絶大なる信頼を得た。また、永年にわたり松山市の教育相談員として、松山市全体の特別支援教育のために尽力してきた。

牟田　智子氏　（退職時　久米中学校）

法令や服務に関する知識が豊富で、学校事務の正確で迅速な事務処理と情報の厳正管理に厳しく当たることができた。校内の事務処理の効率化のためにも、様々な提案や支援に力を入れた。

松山市小中学校事務長会長を３年間務めた。その間、共同処理地域構成校の業務をとりまとめ、構成校校長との連携、情報提供及び室員の指導監督に尽力した。特に、若手の事務職員からの質問に対しても的確な助言を行い、スキルアップに努めた。松山市教育研究協議会や松山市教育会の監事、愛媛県教育研究協議会の理事や監事、松山市通学区域調整審議委員などを歴任している。平成28年度には、松山市志成塾の講師や法令研修会の講師を務めるなど、信頼が厚く、その期待にしっかりと応えた。

久保田　真氏　（退職時　内宮中学校）

保健体育科の教員として研鑽を重ねて優れた指導力を発揮するとともに、主任職や教頭として誠実に職務に取り組んだ。長年にわたり市・県中体連の軟式野球専門部長や県中体連理事長を務めた。その間、四国ブロックで全国中学校体育大会が開催されるたびに要職に就き、大会を成功に導いた。また、軟式野球の強化練習会を立ち上げて競技力向上に努めたり、中体連による研究大会を立ち上げて学校体育の充実に寄与したりした。さらに、松山市教職員施策提案に積極的に応募し、部活動に関する提言で２度受賞した。

学校・地域から信頼される教頭として勤務校での職責を果たすとともに松山市中学校教頭会会長（兼県教頭会副会長）を３年間務め、非常変災対応マニュアルを完成させた。

これらの活動による本市の教育への貢献は誠に多大である。

相原　真紀氏　（退職時　雄新中学校）

愛媛県の教員として36年間、真摯な姿勢で勤務に精励してきた。教育者としての確固たる信念を持ち、日々使命感、責任感を強く持って職務に取り組んだ。保健体育科の教師として規律を重んじた集団づくりに情熱を注ぐとともに一人一人の生徒及びその保護者に寄り添った厳しさの中にも愛情のこもった生徒指導力は確かであり、両者との間に確固たる信頼関係を築いた。部活動においては、新体操部の顧問として自身の経験を活かした専門性を発揮し、優秀な選手を多く輩出するとともに、愛媛県体操協会常任理事として県下全体の体操、新体操の強化・普及に大きく貢献した。教員生活の晩年は学年主任として、学年部の教師集団、生徒集団を統率し、温もりのある学年経営を行うとともに、学校全体を支える存在として尽力した。

堀内　弥生氏　（退職時　西中学校）

明朗快活な人柄である。長年にわたりバスケットボール部顧問として、熱心に部活動の指導をしてきた。高い専門性に併せ、生徒の個性を見抜いた指導で、四国大会11回出場、全国大会７回出場など各大会で優れた成果を上げた。平成24年には、愛媛県選抜チームのスタッフとして、全国大会３位に貢献した。顧問として毎日コートに出向き、「部活動は、心と体を鍛える場」として生徒を指導してきた。その指導方法は、部活動を担当する若手教師の手本になっており、部活動指導の核になる人物である。

令和２年度は学年主任として、生徒に寄り添った指導を行い、節度と思いやりのある学年経営をした。日々誇りとやりがいを感じながら職務に専念している姿は頼もしく、学校運営に貢献した。

「えひめ教育の日」関連事業

「まつやま教育フォーラム2021」高齢慶祝者（白寿・傘寿）名簿

	氏　名	支部		氏　名	支部
白寿	品川良雄様	清水	傘寿	姫田美幸様	石井北
白寿	阿部淳敬様	福音	傘寿	池本裕子様	みどり
白寿	髙橋初美様	中島	傘寿	田中　寛様	正岡
傘寿	増井秀憲様	味酒	傘寿	横田勇三様	北条
傘寿	武智義和様	素鵞	傘寿	村上由美子様	北条
傘寿	井手眞一様	潮見	傘寿	永井邦夫様	河野
傘寿	石田悌昌様	道後	傘寿	安倍康彦様	粟井
傘寿	和田和子様	道後	傘寿	近藤　誠様	粟井
傘寿	森　哲也様	湯山	傘寿	岡田正夫様	粟井

―おめでとうございます―

思い出の学校

新任校「仕七川（しながわ）中学校」の思い出

武智義和（素鵞支部）

昭和40年4月１日、新採教員の辞令授与式で、上浮穴郡美川村立仕七川中学校教諭に補する、という辞令をいただく。数日後、校長先生とバスで学校へ。バスは山道をどこまでも走る。

学校は平らな丘の上にあった。木造平屋建ての数棟の校舎の横に運動場が続く。生徒数約220名、各学年２クラス、教員数10名。校名仕七川は、仕出、七鳥、東川の三つの地区名から生まれた。

私は１年の学級担任となる。クラスは36名。教科は国語（自クラスと２年２クラス）と数学（１年２クラス）を担当、国語と図書館の主任、部活動は野球の副を受け持った。

当校は勉強だけでなく、スポーツも盛んで、男の先生は校長先生以外は運動部を受け持ち、どの部も主体的に練習に取り組み、郡内に名を高めていた。野球部も例外ではなく、私が出るのが少しでも遅くなると呼びに来た。私は主に投げる方を任され、フリーバッティングなど毎日投げた。練習が終わるとボール集め、時には土手の下の方から雑木の中を横一列になってボールを探しながら運動場に上がった。真夏には、休憩時に相方の先生からいただいた粉末ジュースを氷水で溶かし、みんなで飲んだ。うまかった。次の年には県大会に出場、郡大会では主審も体験した。

水泳の授業は下の小学校横の川の広い淵。蛇も一緒に泳いでいた。当時、テスト問題、文集、文法テキスト等の作成は原紙に鉄筆書き、謄写版で１枚１枚刷っていた。宿直もあった。

初年度は郡内研の数学の会場校として私も授業を公開、文部省の学テ（国語と数学）もあった。

次の年には、小学校に給食場が完成、途中から給食が始まった。軽トラで、４校時あきの先生数名が受け取りに行き、５校時あきが戻しに行く。冬は凍った所に石炭ガラをまきながら運んだ。

３年目に転任、他校で３年を受け持ったが、修学旅行の船中で両校が偶然一緒になり、甲板に集まってきた生徒たちで交流、校歌を歌い、学校の様子など語り合ったのも懐かしい思い出である。

生徒の純粋さと、受けとめ育む先生方の背中に教わり育った、楽しく充実した２年間だった。

思い出多い日浦小学校　―へき地教育全国大会―

和田和子（道後支部）

平成６年４月、管理職として初めて赴任したのは、松山市立日浦小学校。市内ではほんの数校しかないへき地１級の学校であった。しかも、平成８年にはへき地教育全国大会の会場校に決まっていた。

まず手を着けたのは、校舎の増改築。多目的ホール、コンピューター室、トイレを男女に分ける等々。

研究会をするにあたって、小規模校だからできることを、研究会のために無理をして、しんどい思いをせずに楽しんでしようと話し合った。もちろん、児童が主役。喜んで、楽しんで活動をしてくれなければ意味がない。その上、地域の人も巻き込んで楽しんでもらおうと考えた。

地域の人に開催の趣旨を伝え、協力を依頼。日浦名物「しし汁」を地域の有志が参加者全員に振る舞う。各家庭は、プランターでマリーゴールドとサルビアを栽培。婦人会は、当日、餅をついて参加者に振る舞う。

さて、主役の34人の児童は、一人ずつ自分のテーマを決め、教職員が４～５人の児童を担当し、地域へ調査に出掛けるときは着いて行き、児童自身が、保護者や地域の人に聞き取りをした。

大会当日は、教室や、体育館、川、神社など、テーマに沿って一人一人の発表の場を設け、発表を聞きに来てくださった先生方と言葉を交わしたりと活躍した。ほうれん草について発表した児童は、ほうれん草の胡麻和えを用意して振る舞い、青竹でご飯を炊いて見せた児童は、竹を割ってご飯を振る舞い、川で釣れる魚について発表した児童は、釣った魚を焼いて振る舞う等、一人一人が工夫し、恥ずかしがらず堂々と発表した。とても楽しかったとの感想。大会後、他県の先生方からの数多くの手紙が届いて感動。

大会を終えてみて、まだ総合的な学習の時間が実施されていないときに先駆けて、一人一人のテーマを決め取り組んだことが、児童の成長に生かされた。児童も教職員も地域の方々も、心に残る大会であったと語り継いでいる。毎年大会の日にみんなが集まりたがり、楽しかった思い出を語り合っている。

記憶の中で　～明浜町立高山小学校～

姫　田　美　幸（石井北支部）

昭和37年４月、最初の勤務地は東宇和郡明浜町立高山小学校でした。（現在は西予市立明浜小学校に統合）学生気分の私を心配した父親が、軽トラに机とわずかの生活グッズを積んで早朝に出かけました。下宿先は木造２階の８畳間くらいだったと思います。ここでの自炊はコンセントとコンロ一つでした。それでも、若輩者の私を温かく受け入れてくださった高山地区の皆様に感謝です。

当時高山地区は石灰業が盛んで、近くの山から掘り出す石灰で山の一部分が真っ白になっていました。石灰を運ぶための港もあり陸路以上に発達していたと思います。

最初に受け持った子どもたちは３年生でした。今は廃校になっていますが、当時は全学年２クラスあり、児童数は少なくはありませんでした。子どもたちは海山に囲まれて、素朴で元気がよかったです。遊び場が海であり山であり、環境に恵まれていたと思います。

ある理科の時間に池の温度と海の温度をみんなで調べに行ったことがありました。寒い日で、学校の池の温度は１℃でしたが、海水温は13℃もありました。海も山も手の届くところにあり、そこから学ぶことができました。私は、温かい海風がこの地区を潤しているのだと思いました。

春は、すぐ近くの野原に出かけて、花や虫の観察をしたり歌を歌ったりしました。野原が理科室になり音楽室になりました。高学年になると若い先生に興味があるらしく、大きな蛇を棒の先に巻いて待ち伏せされ、冷汗をかいたこともあったものです。

コロナ禍の今傘寿を迎え、このような機会を得て、人生の節目を得た思いです。支えてくださった皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

令和２年度　報賞者名簿

氏　名	支　部	氏　名	学　校
落合常章様	東雲支部	石丸誠司様	退職時　石井東小
髙橋　猛様	石井東支部	森本　源様	退職時　番町小
忽那祐三様	浅海支部	沖田義朝様	退職時　久枝小
西原　司様	小野支部	中山正信様	退職時　垣生小
関谷芳郎様	さくら支部	玉井知津江様	愛大附属幼
濱本　昇様	粟井支部	悦内誠二様	福音小

―おめでとうございます―

ブロック編成

区名	学　校　名	区名	学　校　名
１区	番町小、味酒小、八坂小、東雲小、清水小、姫山小、**勝山中、東中**	５区	堀江小、潮見小、久枝小、和気小、みどり小、**鴨川中、内宮中、北中**
２区	新玉小、雄郡小、素鷲小、桑原小、たちばな小、双葉小、**拓南中、雄新中、桑原中、城西中**	６区	湯山小、日浦小、道後小、湯築小、伊台小、五明小、**道後中、湯山中、日浦中、旭中**
３区	味生小、生石小、垣生小、余土小、味生第二小、さくら小、**津田中、垣生中、余土中、西中**	７区	浮穴小、石井小、荏原小、坂本小、椿小、石井東小、石井北小、**久谷中、南中、南第二中、椿中**
４区	三津浜小、宮前小、高浜小、興居島小、中島小、**三津浜中、高浜中、興居島中、中島中**	８区	久米小、小野小、北久米小、福音小、窪田小、**久米中、小野中**
		９区	浅海小、難波小、立岩小、正岡小、北条小、河野小、粟井小、**北条北中、北条南中**

活動の様子　令和３年度の文化講座について

福利厚生部

本年度は五つの文化講座を開講しています。昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大の影響で休講になった場合もありましたが、会員の皆さんは、和やかな雰囲気の中で熱心に受講され、楽しまれています。

【川柳教室】

第３水曜日の午後に文教会館で開講しています。11名の退職・賛助会員が、栗田忠士先生のご指導で川柳作りに励んでいます。

【俳句交換会】

12名の退職・現職・賛助会員の俳句が事務局に集まり、毎月、交換句集を発行しています。吉田晃先生、吉田博子先生のご指導を受けながら、句作を楽しんでいます。

【ヨガ教室】

第２土曜日の午後に文教会館で開講しています。20名の退職・賛助会員が、脇坂恭子先生のご指導でヨガに親しんでいます。

【詩吟教室】

月２回月曜日の午前に文教会館で開講しています。15名の退職・賛助会員が、全国大会で優勝された伊賀上峰山先生のご指導で活動しています。

【ピラティス教室】

第１土曜日の午前に文教会館で開講しています。28名の退職・現職・賛助会員が、木下絵理先生のご指導でピラティスに親しんでいます。

年度末に、現職・退職会員全員に、令和４年度の文化講座の案内文書を配布します。興味をお持ちの方は、ふるってお申し込みください。今年度受講されている方も、改めて申込書をご提出ください。賛助会員も申し込むことができます。

なお、会員のニーズに合った新しい講座の開設も、検討していきたいと思います。ご要望があれば、松山市教育会事務局までご連絡ください。

松山市教育会シンボルマーク受賞作品

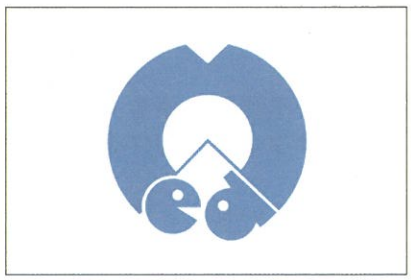
＜最優秀作品＞　松山市教育会旗に採用

八木　誠一　先生（興居島小中学校校長）

広々とした青い海の色を背景に、子どもと教師による学校教育の象徴としてみかんの黄色と若葉色で円を作りました。この学校教育を基盤に子どもと保護者、地域の方々の顔を表す○を描き、最も左の子どもの○を起点に保護者や地域の方々へとつながりが広がって、その三者のつながる姿が松山のＭを描くようにしました。三者のつながりは、愛媛の「え」とも見えるように図示しました。

＜優秀作品＞

杉野　巻男　先生
（北条支部ＯＢ）



大川　博司　先生
（日浦中学校教頭）

真部　佐惠　先生
（城西中学校教諭）

『松山市教育会情報』をご愛読いただきありがとうございます。令和３年度も、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、参集して行うブロック活動等の各種行事が十分に行えない時期が長く続きました。そこで、理事会の承認を得て、本誌第104号と105号は合併号とし、２月に発行することといたしました。現職会員と退職会員が自由に集える日常が早く戻ってくることを願ってやみません。

（調査研究部長）

「まつやま教育フォーラム2021」講演

誰でも書けるって本当に？

～ショートショートの書き方講座と、そのすすめ～

田丸　雅智　氏

受講者作品

「空が飛べるパソコン」

夢見る50代

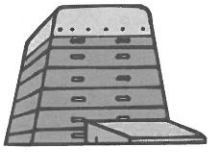
空が飛べるパソコンが開発された。コンピュータの最適なプログラミングで、人間の力をアシストして、身体に着けたプロペラを回し、空中を自由に散歩することができる。カメラ機能が付いていて、空から見える景色をみんなに配信することもできる。僕は、夢中でペダルをこいだ。夢のようなわくわくする体験だった。運動不足な僕でも無理なく健康になれる。でも、こぎ続けないとバッテリーが切れる。プロペラが止まり、落ちる寸前に目が覚めた。

「ゴツゴツ石」

パクさん

川辺にある普通のゴツゴツ石。
その中にひっそりと隠れている石がある。
見た目とは裏腹に、実はふわふわ石。
しかも、じんわり温かい。
散歩している人がうっかり踏んでしまうと、やわらかすぎてびっくりさせてしまう。
ただ、この石のうわさがムササビ界で広まっており、ムササビたちが狙っているという。
この石を見つけて布団にしてしまったムササビもいるとか、いないとか。
ある時、川辺で石投げをしていた少年が、この石を投げてしまった。
ところが、この石は軽すぎて、跳ねず、沈まず。
そのまま流されて、海でプカプカ。
見た目はゴツゴツ石、でも実はふわふわ石。
今もムササビたちが探しているのは言うまでもない。
そして、どこかの島に流れつき、ひっそりと暮らしているのかもしれない。

「手が出る跳び箱」



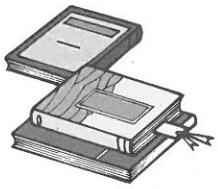
mebiちゃん

体育の時間。
跳び箱は、きらいだ。開脚跳びをしたら、しりもちをつくし、台上前転をしたら、横から転げ落ちる。
「今日の跳び箱、いやだなあ」と思いつつ、踏切版をばーんと跳ぶと、誰かがふっと支えてくれた。横に落ちることなく、台上前転、成功！しかし、跳び箱の横には、誰もいない。
そして、また、僕の番。またまた、成功。絶対、誰かが、支えてくれている。
跳び箱をよく見ていると、跳び箱から手が、すっと伸びて、前回りを手伝ってくれている。優しい跳び箱。
でも、待てよ。支えがいらない場合、気を付けないと、セクハラ跳び箱になってしまう！苦手な人専用の跳び箱にしておかないと。

「しゃべる小説」

mebiちゃん

推理小説が好きな私。どんどん読み進める。
「この漢字なんて読む？」「〇〇さ。」どこかから聞こえてくる声。「なるほど、そっか！」
また、読み進める。「あれ、この人、誰だっけ。」「〇〇さんの弟。」
またまた、声が。不明な点に応えてくれる便利な声。
「犯人、誰だっけ。」「犯人は、・・・。」
「やめて、そこは答えてくれなくていいから。」
読解が難しい場合に便利な本ですが、犯人までしゃべられると、
推理小説の醍醐味がなくなってしまう迷惑な本になってしまいます。



「情熱的な医師」

ブラック・ジャック

大学病院の医師がいた。この医師は、医師としての知識・技術は確かではあるが、日頃の冷静沈着な態度は、患者にとって親しみにくい存在であった。ある日の通勤途中に不思議な色の石を拾う。この石に触れると、診察や医療行為が情熱的になる。医師の情熱的な言動は、完治を諦めかけていた患者や家族に勇気を与え、患者の自然治癒力を高め不可能を可能にしていく。

しかし、石の効果は数時間しかなく、元の自分に戻ってしまい、患者を困惑させる。やがて、医師は石の力に頼らず、自らの関りを変える意思を抱くようになる。

「コンビニ火山」

中島　小太郎

どこへでも自由に移動させることができる火山が発見された。この火山は、水の中へも移動させることができるので、新しく陸地をつくることができたり、島を陸地と繋げることができたり、夜には打ち上げ花火のように活用できたりと使い方は無限にある。ただし、この火山は、せっかく陸続きになったものを吹き飛ばしてしまったり、噴火が思いのほか小さかったりと噴火の大きさを制御するのが難しい。

「電気自動車になる水」

オー　ノー

身の回りにある水で、電気自動車ができました。水を電気分解して水素を作り、それを燃料にするため、経済的で環境にも優しい車です。ただ、走っているときに水を消費するため、屋根がなくなってオープンカーになります。それじゃあ、雨が降ったとき、濡れちゃうじゃないかって。だいじょうぶ、雨の水で屋根が再生するから。

田丸雅智氏の感想

いずれもユニークで、いいですね！
特に火山のお話では、花火のようにもなるという発想に惹かれました。
みなさん、引き続き創作に挑戦していただければうれしいです。